

## 日本語同格節構文の3つの型の選択モデル

渡部泰門

東北大学大学院国際文化研究科

ywata@insc.tohoku.ac.jp

### 1. はじめに

これまで、補文化辞の生起可能性から分類される日本語同格節構文の3つの型(「トイウ・トノ」型、「トイウ・ $\phi$ (ゼロ)」型、「トイウ」型)の選択は、多くのモデルによって説明されてきた(e.g. 寺村1975-78, Terakura 1984, 中島1990, 大島1991, 藤田1991, 本多1996, 益岡1997)。しかし、それらのモデルの妥当性を多くの実例によって検証する作業は明示的に行われてこなかった。Watanabe, Horie, and Sato(1997)では、寺村(1975-78)および益岡(1997)の提案するモデルを取り上げ、それらが実際にどの程度の予測可能性を有しているかを『朝日新聞』のコラム「天声人語」1989年掲載分を資料に検証した。その結果、上記モデルからは説明されない例が多く存在することが明らかとなった。

本論文では、「天声人語」に加えて新潮文庫に収録されている小説(7作家8作品)を対象に再度調査を行い、寺村・益岡によるモデルでは説明不可能な例が依然多く存在することを明らかにする。さらに本論文では、寺村・益岡によるモデルを発展させた同格節構文の選択モデルを提案し、それを用いることでより多くの例が説明可能となることを示す。

### 2. 日本語同格節構文の3分類

同格節構文とは、以下の(1)(a)、(b)のように、修飾節 MC と主名詞 N とが同格の関係にある構文、つまり修飾節が主名詞の内容を表している構文をいう。補文化辞とは、トイウ、トノ、 $\phi$ のように、修飾節と主名詞の間に生起し両者の同格性を標示する形式をいう。<sup>1)</sup>

- (1)(a)  $[_{NP}[_{MC}\text{郵政事業は民営化するべきである}]_{MC}$   
 $[_{COMP}\{\text{トイウ/トノ}\}]_{COMP}[_{LN}\text{主張}]_{LN}]_{NP}$

<sup>1)</sup> 以下、本論文では原則として、1989年の「天声人語」、および新潮文庫に収録されている作品からの実例を使用し、出典を「(天声、〇月×日)」または「(作家名『作品』、ページ数)」の形で明記する。( )で出典を示していない例文は筆者による作例である。なお、以下の例文に現れるトイウ、トノの全てについて、実例で、しかも原典に現れていた場合はひらがなで表記し、作例の場合と、実例でも原典には現れていなかった場合はカタカナで表記する。

- (b)  $[_{NP}[_{LMC}\text{子ども3人が車にはねられる}]_{MC}$   
 $[_{COMP}\{\text{トイウ/}\phi\}]_{COMP}[_{LN}\text{事故}]_{LN}]_{NP}$

同格節構文は、補文化辞の生起可能性から次の3つの型に分類できる。

- (2)(a) トイウまたはトノが生起可能な型  
 (b) トイウまたは $\phi$ が生起可能な型  
 (c) トイウのみ生起可能な型

(2)(a)-(c)の具体例は、(3)(a)-(c)である。

- (3)(a) 「議員になると常識を忘れ、国会は動物園だ」{トイウ/との/\* $\phi$ } 発言(天声、6月15日)  
 (b) アタマの毛のうすい人はアタマ以外の身体  
 の毛、体毛がこく、アタマの毛のこい人  
 は、体毛がうすい{という/\* $\phi$ /\*トノ} 事  
 実(井上ひさし『ブンとフン』、92ページ)  
 (c) 土曜閉庁で行政サービスが低下しないか{と  
 いう/\*トノ/\* $\phi$ } 点(天声、1月14日)

### 3. 同格節構文の選択モデル

前節に示した同格節構文の3つの型の選択を、寺村(1975-78)および益岡(1997)は以下のモデルによって説明している。<sup>2)</sup>

- (4) 主名詞が発話や思考に関係する場合、トイウ  
またはトノが生起可能な型が選ばれる。  
 (5) 主名詞が発話や思考に関係しない場合、  
 (a) 修飾部に疑問の「か」や断定の「だ」と  
 いった、当該の文の命題内容に対する話し  
 手の心的態度を表現する形式が現れていれ  
 ば、トイウのみ生起可能な型が選ばれ、  
 (b) 修飾部に疑問、命令、勧誘、禁止といった  
 話し手の心的態度を表現する形式が現れて  
 いなければ、トイウまたは $\phi$ が生起可能な  
 型が選ばれる。

たとえば、前節(3)(a)では主名詞である「発言」が発話に関係しているので、トイウまたはトノが生起

<sup>2)</sup> (4)、(5)は、寺村(1975-78)および益岡(1997)が共有しているモデルである。

可能な型が選ばれ、(3)(b)では主名詞である「事実」が発話・思考に関係せず、修飾部に話し手の心的態度を表現する形式が現れていないので、トイウまたは $\phi$ が生起可能な型が選ばれていると説明される。(3)(c)では主名詞である「点」が発話・思考に関係せず、修飾部に話し手の心的態度を表現する疑問の「か」が現れているので、トイウのみ生起可能な型が選ばれていると説明される。

本論文では、同格節構文の選択モデルとして以下のモデルを提案する。

- (6) 名詞句全体によって表現される命題が、修飾部に「引用の助詞ト」と「主名詞と関係の深い発話・思考動詞」を付加して作られる命題を含意する場合、トイウまたはトノが生起可能な型が選ばれる。
- (7) 名詞句全体によって表現される命題が、修飾部に「引用の助詞ト」と「主名詞と関係の深い発話・思考動詞」を付加して作られる命題を含意しない場合、
  - (a) 本来連体節には生起しない要素が修飾部中に現れていれば、トイウのみ生起可能な型が選ばれ、
  - (b) 本来連体節には生起しない要素が修飾部中に現れていなければ、トイウまたは $\phi$ が生起可能な型が選ばれる。

以下、具体例に即して(6)および(7)(a)、(b)の条件が実際にどう機能するかを見る。

- (8) モルヒネ精製の工場は台北に造ってほしい{トイウ／との／\* $\phi$ } 希望(星新一『人民は弱し、官吏は強し』、77ページ)
- (9) 四千に達したかどうか、{という／\*トノ／\* $\phi$ } 程度(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』、409ページ)
- (10) 汚染地域の周りに何本も穴を掘って大量の水を流し込み、中央部に掘った穴から水を吸い上げる{という／ $\phi$ ／\*トノ} 方法(天声、2月6日)

例文(8)は、名詞句全体によって表現される命題(8')が、修飾部に「引用の助詞ト」と「主名詞と関係の深い思考動詞『希望する』」を付加して作られる命題(8'')を含意する。

- (8') 「モルヒネ精製の工場は台北に造ってほしい」という内容をもった「希望」が存在する
- (8'') (誰かが)モルヒネ精製の工場は台北に造ってほしいと希望する (= (8') が含意)

これは(6)の条件に相当するが、(8)では(6)が予測する通り、トイウまたはトノが生起可能な型が選ばれている。

例文(9)の主名詞「程度」は、対応する発話・思考動詞をもたない(cf. 「\*程度する」)ので、例文(9)から上記(8'')のような発話・思考行為を表す命題を導くことはできない。したがって、(9)では名詞句全体によって表現される命題が、修飾部に「引用の助詞ト」と「主名詞と関係の深い発話・思考動詞」を付加して作られる命題を含意していない。また、(9)の修飾部中には本来連体節には生起しない要素である疑問の「か」が現れている。これらの特徴は(7)(a)の条件と一致するが、(9)では(7)(a)の予測通りトイウのみ生起可能な型が選ばれている。

例文(10)の主名詞「方法」は、対応する発話・思考動詞をもたない(cf. 「\*方法する」)ので、例文(10)から上記(8'')のような発話・思考行為を表す命題を導くことはできない。したがって、(10)では名詞句全体によって表現される命題が、修飾部に「引用の助詞ト」と「主名詞と関係の深い発話・思考動詞」を付加して作られる命題を含意していない。また、例文(10)の修飾部は以下に示すようにそのままの形で関係節中に含めることができる。

- (10') [汚染地域の周りに何本も穴を掘って大量の水を流し込み、中央部に掘った穴から水を吸い上げる]技術者たち

このことから、例文(10)の修飾部中には「本来連体節には生起しない要素」が現れていないことが分かる。これらの特徴は(7)(b)の条件と一致するが、例文(10)では(7)(b)の予測通りトイウまたは $\phi$ が生起可能な型が選ばれている。

#### 4. 同格節選択モデルの予測精度調査

本節では、前節に示した2つのモデルの予測精度を「天声人語」と「新潮文庫」の用例に基づいて調査し、本論文で提案するモデルがより高い予測精度を有していることを示す。

##### 4.1 方法

調査は次の方法で行った。まず、「天声人語」1989年掲載分と、新潮文庫に収録されている小説『砂の女』(安部公房)、『あすなる物語』(井上靖)、『ブンとフン』(井上ひさし)、『コンスタンティノーブルの陥落』(塩野七生)、『人民は弱し、官吏は強し』(星新一)、『点と線』(松本清張)、『雁の寺・越前竹人形』(水上勉)を対象に、トイウまたはトノが現れている同格節構文を検索した。次に、個々の例におけるトイウ、トノ、 $\phi$ 相互の交替可能性を複数の日本語話者の直観を基に調査した。その際、

個々の例は文脈から切り離した、名詞句の形で被験者に提示した。最後に、寺村・益岡によるモデルと本論文で提案するモデルのそれぞれが、各用例の統語的・意味的特徴から生起可能と予測する補文化辞の組み合わせを、実際に日本語話者が生起可能と判断した組み合わせと照合した。<sup>23)</sup>

## 4.2 結果

検索された同格節構文の総数は763であった。うち45例は補文化辞相互の交替可能性の判断が困難か、あるいは話し手の間で大きな揺れが見られたので、資料から除外した。残る718例(「天声」358例、「新潮」360例)中、寺村・益岡のモデルにより説明可能であったのは444例であった。つまり、寺村・益岡モデルの予測率は61.8%であった。一方、本論文で提案するモデルは585例に説明を与えることができた。これは、全体の81.5%に相当する。両モデルの予測率を比較すると、本論文で提案するモデルの有効性が確かめられる。

## 4.3 考察

寺村・益岡モデルに比べ、本論文で提案したモデルの予測精度が高かったのは、主に次の2つの要因によると思われる。第1の要因は、寺村・益岡モデルでは、主名詞が発話・思考に関係しているかが問題にされたのに対し、本論文のモデルでは、名詞句全体が発話・思考を表す命題を含意しているかが問題にされたことである。たとえば、次の例文(11)を見よう。

- (11) 日本でも外国並みに脳死者からの臓器移植を、{トイウ／との／\* $\phi$ } 動き(天声、11月15日)

主名詞のみに注目して発話・思考との関連を問う寺村・益岡モデルでは、主名詞「動き」が発話・思考に関係していない(11)はトノが生起不可能と予測される。しかし実際はトノも生起可能である。一方、名詞句全体が発話・思考を表す命題を含意しているかを問題にする本論文のモデルでは、(11)は名詞句全体が表す命題(11')が思考を表す命題(11'')を含意しているので、トノは生起可能と予測される。

- (11') 「日本でも外国並みに脳死者からの臓器移植を」という内容をもった「動き」が存在する  
(11'') 日本でも外国並みに脳死者からの臓器移植を、と希望する(=(11')が含意)

<sup>23)</sup> 寺村・益岡モデルおよび本論文で提案するモデルがどの補文化辞を生起可能と予測するかを決定するために、名詞または動詞が発話・思考に関係しているかを判定したが、その際、一部、国立国語研究所(1993)を参考にした。

これは実際の生起可能性と一致する。

第2の要因は、寺村・益岡モデルでは、修飾部の統語的特徴としては、もっぱら話し手の心的態度マーカーの出現の有無が問題にされていたのに対し、本論文のモデルでは、述語の一部が省略された文を含む、本来連体節には生起しない要素一般の出現の有無が問題にされたことである。たとえば、以下の例文(12)の修飾部中には話し手の心的態度を表現する形式は現れていない。

- (12) 閣僚の任命に本採用ならぬ試用、トライアウト{という／\*トノ／\* $\phi$ } 例(天声、3月11日)

さらにこの例における主名詞「例」は発話・思考に関係していないので、寺村・益岡モデルではトイウまたは $\phi$ が生起可能と予測される。しかし実際には $\phi$ は生起不可能である。一方、例文(12)は名詞句全体が発話・思考を表す命題を含意しておらず、修飾部中に、本来連体節には生起しない、述部省略を含む文が現れている。したがって、本論文で提案したモデルではトイウのみ生起可能と予測されるが、実際、例文(12)はトイウのみ生起可能となっている。

## 5. トノの使用と容認可能性

本節では、今回調査したテキストのうち、トノの生起が予測される環境でのトノの容認可能性が高かったテキストは、トイウに対するトノの使用率も高く、トノの容認可能性が低かったテキストは、トイウに対するトノの使用率も低かったことを報告する。本節ではそうした相関に基づき、トノの容認可能性を規定している要因と、トノの使用率を規定している要因とが同一のものである可能性を指摘する。両者が同一のものであるということは、トノの使用が容認されない用例と、容認はされても使用されていない用例とが連続していることを意味する。

表1は、本論文で提案したモデルがトノの生起を予測する用例の数(上段)とその中で実際にトノが生起可能であった用例数(中段)及び前者に占める後者の割合(下段)をテキストごとに示したものである。

表1 トノの容認可能性

	天声	砂の女	あすなろ	ブンと
トノ予測	250	14	23	10
トノ可能	207	7	16	5
可能／予測(%)	82.8	50.0	69.6	50.0

  

	コンス	人民は	点と線	雁の寺
トノ予測	63	90	36	23
トノ可能	59	82	26	15
可能／予測(%)	93.7	91.1	72.2	65.2

表2および3は、日本語の話し手がトイウとトノの両方を生起可能と判断した用例のうち、実際にトイウ・トノのそれぞれが使用されていた用例の数(表2)と割合(表3)をテキストごとに示したものである。

表2 トイウとトノの使用数

	天声	砂の女	あすなろ	ブンと
トイウ使用	125	7	17	4
トノ使用	82	0	0	1
計	207	7	17	5

  

	コンス	人民は	点と線	雁の寺
トイウ使用	48	20	26	15
トノ使用	12	64	1	0
計	60	84	27	15

表3 トイウとトノの使用率(%)

	天声	砂の女	あすなろ	ブンと
トイウ使用	60.4	100	100	80.0
トノ使用	39.6	0	0	20.0

  

	コンス	人民は	点と線	雁の寺
トイウ使用	80.0	23.8	96.3	100
トノ使用	20.0	76.2	3.7	0

表1と表2・3を比較すると次のことが分かる。トノの容認可能性が80%を超えている「天声人語」「コンスタンティノープルの陥落」「人民は弱し、官吏は強し」の3つのテキストではトノが一定数使用されているのに対し、トノの容認可能性が80%以下の「砂の女」「あすなろ物語」「ブンとブン」「点と線」「雁の寺」の5作品では、トノが全くもしくはほとんど使用されていない。<sup>24</sup>

トノの容認可能性の高いテキストはトイウに対するトノの使用率も高く、トノの容認可能性の低いテキストはトイウに対するトノの使用率も低いという相関は、トノの容認可能性を規定している要因と、トノの使用率を規定している要因とが同一のものである可能性を示唆する。両者が同一のものであるならば、それが強く働いた時、トノは容認不可能となり、弱く働いた時、トノは選ばれにくくなると考えることができる。このことは、トノが容認不可能な用例と、容認はされでも使用されない用例とが連続したものであることを意味する。ただし、トノを容認不可能なものに、もしくは選ばれにくくしている要因が何かということは、現時点では分かっていない

<sup>24</sup> 「ブンとブン」におけるトノの使用率は20.0%であるが、使用数は1である。

い。その要因の解明は、今後の課題としたい。

## 6. おわりに

本論文では、日本語同格節構文の3つの型(「トイウ・トノ」型、「トイウ・ $\phi$ 」型および「トイウ」型)の間の選択を説明するモデルとして寺村・益岡が提案するモデルがどの程度の説明力を有しているかを、随筆と小説を資料に調査した。その結果、寺村・益岡によるモデルは61.8%の予測率を有していることが明らかとなった。さらに本論文では、名詞句全体が発話・思考を表す命題を含意しているか、また、本来連体節には生起しない要素が修飾部中に現れているかという2つの媒介変数に基づく同格節構文の選択モデルを提案し、それを用いることで81.5%まで予測精度が向上することを明らかにした。それに加えて本論文では、トイウと交替するトノには、生起が予測される環境での容認可能性と、実際の使用率との間に一定の相関があることを明らかにした。

## 謝辞

本研究は一部、平成9年度東北大学大学院国際文化研究科共同研究プロジェクト経費の補助を受けて行われている。

## 引用文献

- 大島資生. 1991. 「連体修飾節構造に現れる『という』の機能について」『人文学報』225号、27-58.  
 国立国語研究所. 1993. 「分類語彙表フロッピー版」東京：国立国語研究所.  
 寺村秀夫. 1975-78. 「連体修飾のシンタクスと意味その1-4」『寺村秀夫論文集-日本語文法編-』pp.157-320. 東京：くろしお出版、1992.  
 中島孝幸. 1990. 「『トイウ』の機能について」『阪大日本語研究』2号、43-55.  
 藤田保幸. 1991. 「引用と連体修飾」『表現研究』54号、26-34.  
 本多啓. 1996. 「『という』についての覚え書き」『駿河台大学論叢』12号、105-27.  
 益岡隆志. 1997. 「複文」東京：くろしお出版.  
 Terakura, Hiroko. 1984. Noun modification and the use of *to yuu*. *Journal of the Association of Teachers of Japanese* 18:1. 23-55.  
 Watanabe, Yasukado, K. Horie, and S. Sato. 1997. Complementizer selection in the Japanese appositive clause construction. Paper Presented at the 8th International Conference on Cognitive Processing of Asian Languages and Symposium on Brain, Cognition, and Communication, Dec. 1, Nagoya University, Nagoya.